

前進座芝居「旅の終わりに」

出演顛末記

月田 秀子

木枯らしに向かって
 自転車のペダルを踏むのが好きだ
 私は、北国の冬を知らない

疲れきった身体を引きずりながら
 ずしりと重いかばんを
 エイとばかりに肩にしよ上げ
 坂道を一步一步踏みしめ登ってゆくのが
 私は好きだ
 けれど私は、
 死んだ子供の重たさを知らない

満腹のお腹をさするより
 空腹感を抱えている自分が好きだ
 飢えの中で
 やせ衰え死に向かう人たちのことを
 私は知らない

繰り返される日常の中で
 むしように海を見たくなる
 荒狂う海の怖さを私は知らない

私は月に向かって吠えることしかできない
 例え月のない夜でも

そんな私の歌に
 今年も耳を傾けてくださいますか

2002年新春

月田 秀子

北海道からわざわざ駆けつけてくれた千田女史と、銀座で待ち合わせ、約束の時間より若干遅れて、会場である「新国立劇場」に到着。新宿で、「新そば」の看板に目がくらみ、ビールと、ざるそば一枚を口にしたりである。颯爽とハンドバック一つで歩く千田女史の後ろを、衣装やらかばんをゴロゴロと転がし、会場に着くや、前進座の制作部のS氏の「いや、どうも失礼しました。お待ちしておりました」との開口一番。何が失礼したって？千田女史と、私を勘違いしたらしい。そりゃ、かっぱくを見たら、間違えるのもなずける。グレイのスーツに赤い靴の千田女史、かたや黒装束に、荷物ゴロゴロの月田である。(怪我の功名というべきか、千田女史は、それ以来、私の荷物を「スターに、持たしちゃいけない」といいながら、持ってくれるようになった)

まずびっくりしたのは、楽屋に入るまでのセキュリティチェックの、厳しい事。カードを渡され、それを入り口横の器械にかざすとドアが開く。まるで水戸黄門になったような気分で楽屋に入る。今日は初日で、昼の部は、大月みやこさんが、夜の部は、私が歌うことになっていた。

出番の前に、11月の東京帝国ホテルでの「イタリアの夕べ」で着ることになっているヴァレンチノの衣装選びがあった。五木寛之さん立会いで、主催の世界文化社の関係者の面々が見守る中、衣装は決まった。黒の薄手のオーガンジーのブラウスと、黒のシルクのロングスカートである。私はにわかにはシンデレラの気分。

私の役どころは、二部の冒頭のパーティーの場面で、ゲスト歌手として歌うだけのことである。自分のコンサートとは違い、1曲勝負だ。ギターの野上圭三が、作ってくれたカラオケで、「孤独」を歌った。これも初体験。舞い上がっている私には聞こえなかったのだが、歌い終わって客席から「ブラボー」の声が上がったという。あとで、五木先生に、「客席にサクラを入れているんですか？」と訊くと、そんな事はないという。嬉しかった。五木先生が、憤慨した様子で語るところによると、先生が、「今日はファドの歌手が出るから」と、関係者にいうと、関係者氏曰く、「はあー、新潟の方ですか。さぞかし民謡がお上手なんでしょう」という答えが返ってきたという。

翌日の昼の部で私の出番は終わる事になっていた。楽屋を出ようとしたところに、五木先生のマネージャーK氏が、息せき切って「月田さん、夜もお願いします」と走りこんできた。隣の部屋にはすでに夜の部の歌手の人がスタンバイしているにも関わらず、夜の部の出演の運びとなった。彼女に聞こえないように千田女史と声を押し殺して、「やったね!」と、にんまり。ごみ箱に捨てた、どら焼きを食べながら、空腹を抑えている所へ、K氏が、五木先生からといって、すしを差し入れてくれた。三回目の歌は、正直言って力みすぎて、余りいい出来ではなかったように思う。

思いがけず、一回分増えたギャラに浮かれて、千田女史と銀座ですしを食べながら、祝杯をあげた。飲みながら、この仕事をする前の自分とちよつと違う自分を感じた。一つずつ、新しい事を経験するたびに、私の心の中の、宝物入れの引出しが増えてゆく。その心を携えて、翌日は、室蘭に飛んだ。室蘭でのコンサートは、千人ほどの人が聴きにきてくれた。

私のファミファダル 月田秀子 東京/Magdalena

月田秀子さんとの出会いは偶然にも一枚のチラシから始まった。ほんの些細な興味からこの人の歌が聴いてみたいと、東京のチケットを既に手配していたにもかかわらず、どうしても待てず、気づいたら大阪行きを決めていた。

12月8日、初めて向かう月田秀子のコンサート。私の胸は熱い。サンケイホールにはいろいろな人がいた。月田オタクつばい人、新鮮な感じの若者、またゴージャスなおば様たちも。東京にない大阪人の熱気を感じた。

会場ではポルトガルワインが販売されていて、気持ちよさげに既に飲んでいる人もいる。博物館にはなかったアットホームというかフレンドリーな雰囲気だ。「月田さん月田さん」と何十回も呪文のように月田秀子の名前を会話に登場させる紳士。好きなんだろうなあ。どんな人なんだろうなあ。始まりの鐘が鳴り、席に着く。

静かなメロディが会場に響き渡る。そして月田秀子の声が、聞こえてきた。一曲目は「ユニコーン」。低く、しかし澄んだ声が会場に響き、静寂に包まれた。そして、月田秀子の登場。長い長い大きく巻いた髪に、黒いドレスのシルエットが舞台に浮かび上がる。早くも私はその声に惹かれていた。発するポルトガル語の一言一言に、魂がこもっている。

何年も公演を続ける大阪では緊張するという。しかし、彼女のホームグラウンドであるという何か安心した、そして気合の入った雰囲気は、初めてでも十分伝わった。

今回は、アマリアロドリゲスが残した詩集から数曲、そして第二部はギリシャをはじめとするポルトガル以外の歌も披露するという。彼女の「他国制覇」のさがけとなるコンサートが初だったのはラッキーだったといえるだろう。

椅子に座って詩を朗読するファディスタ。彼女の運命を決定付けたアマリアロドリゲスの出会いを大切に朗読である。彼女の朗読は、よく響き、聴きやすい美しい日本語だった。そしてその歌は、力強く、ときに切なく、ドーンと私の胸にせまった。

一方、語りではかなりお茶目。はじめてなのに思わず声援を送りたくなる。これは大阪独特で、東京ではほとんどなかった。なんとなく、冷たいというのではなく、聴衆の彼女の歌への向かい方が東京と大阪では違ったような気がする。

第一部はあっという間に過ぎた。休憩時間にはロビーでは興奮気味に語る声がざざめく。

一方私は沸き起こる感情を誰に話せるでもなく、そばにあった

メモ用紙に走り書きをした。「LA FEMME FADALE」。ファミファタルという言葉があるが、月田はファドの女、ファミファダルだ。「宿命の女」または「運命の女」。ポルトガル語で運命は「ファド」であるから、彼女は「ファミファダル」、ファドが彼女の運命を決定付けたんだなあ、魂の歌を歌うんだなあ、「これはすごい出会いをしてしまった。」と一人で勝手に感動し感慨深くその言葉を繰り返しメモに書いた。

さて、そして第二部。大阪では新鮮味のある公演、東京では彼女の全身からたぎるいい意味での「オーバーヒート」を感じ、ああやっぱりライブだなあ、この人はライブが最高だなあ、二回来てよかったわと思わせた。大阪ではピンクの衣装、東京では白に黒の刺繍がほどこされた衣装で登場。いずれも彫りの深い顔立ちのせいかはまっている。

一曲目はギリシャ語であろうが、「祈る人」。今でも私の頭にはその甘い調べが残っている。言葉の意味はさすがにわからないが、でも、言葉でないすばらしいメッセージをその歌から感じ取った。その次は日本語で「汽車は八時に出る」。五木寛之氏の作詞であるが、メロディはミキステオドラキス。なんとも悲しい歌である。落ち込んでるときに聴いたら後戻りできそうにない、というか八時に出かけるしか道がなさそうな気持ちになる。その後はなんと「日曜日はだめよ」。大阪では手拍子つきだったのに、東京ではそれがなくやや残念だったが、月田の新たな挑戦といったところか。他国制覇の精進を祈っている。

その後のスペイン語、イタリア語の曲と心地よい時間が流れていく。第二部で圧巻だったのは、大阪も東京もそうだったが、「バルセロナの舟の上で」だった。ファドはもちろん聴かせるのだが、この「バルセロナ」は盛り上がりといい聴衆の吸い込まれ方といい、最高だったといえるだろう。そして、映画にもなった「大河の一滴」。これからこれを歌いこんでいくという。楽しみである。

アンコールはバックトゥベイシックの「暗いはしけ」と「旅のおわりに」。そしてファンからの花束に包まれ、チャーミングな笑顔とハスキーな美声を残し、公演が終わった。

購入したビデオにサインをもらいに並んだとき初めて間近でみた月田さんの顔は遠くで見ると以上に彫りが深く、写真で見るとより明るく、そして予想通り強い瞳の輝きを持っていた。今後もこのファミファダルを応援していきたい、と強く思った夜であった。

biografia

AMÁLIA

一ヴァートル・パヴァオン・ドス・サントスに語った自伝④
訳:松田美緒

9歳の頃、祖母は私を学校に入れたが、彼女は読み書きがほとんどできなかったので、自尊心のためだった。私は学校に入る年齢をすでに越えていた。学校まで連れて行ってくれたのは祖母の知り合いの近所のおばさんで、彼女のお陰で3ヶ月遅れたとはいえ、編入試験を受けられた。そこで2年生に編入が決まった。学校に通ったのは、全部で3年と3ヶ月の間だった。

学校は大好きだった。学生になるのは、私の夢だったから。勉強がしたかったのか、制服のマントと平服に憧れていたのか、よくわからない。担任の先生は、わたしにとてもうまく接してくれた、ただ一人の人だ。長年の経験で、子供の扱いを心得ていたのだろう。名をリーナ・ダ・コンセイサウ・バレットといい、クレッシェ通りにある彼女の家に、何度か連れて行ってくれ、お茶をご馳走してくれた。

私は教科書を持っていなかった。教科書なしで学校に行き、授業はすべて、耳で聞いて暗記した。いくら聞いても頭に入ってこなかったのは、地理の授業だった。そこで先生は、耳で聴くだけでは覚えられないはずがないので、教科書を買ってもらいなさい、と言った。私は祖母を一所懸命説得し、とうとうある日、地理の教科書を買ってもらった。その後、彼女に他の科目の教科書を頼むと、こう言った。「あの本はまだ新しいじゃないか。どうしてほかのを欲しがらんかね？」一冊の本に、すべての科目が載っていると思っていたのである。ノートについても同じだった。もしも、ある科目の板書がページの終わりから3行上で止まっていたら、次の授業の時は、ちょうどその場所から書き始めないと気がすまないらしかった。試験の日が近付くと私は、もう諦めてしまおうか、という感じになった。12歳の頃で、ひどく恥ずかしい気持ちになった。学校を続けていられたのは、先生のお蔭だった。

学校にいる時間は、私だけの時間だった。埃を取れとか、皿を洗えとか、言う人は誰もいない。学校で私は「秀才ちゃん」で通っていた。いつも言葉に気を遣っていて、言葉へのそういう直感的な感性があったから、引用も間違えることなくできた。きれいなポルトガル語を話し、一度ある言葉は使うべきではないと知ると、二度と使わなかった。私の初期録音の頃のポルトガル語は、現在と全く変わっていない。言葉の意味付けは変わろうとも、調子は同じままだ。私は言葉に敏感すぎて、俗語は使えない。使いたくても使えなかった。私はいつも従順な子で、するなと言われたことはしなかった。ある日のこと、筆記試験中にインクの染みを落とし、そのせいでもう一度やり直さなければいけなくなった。二度目にも同じ事をし、三回目も受けさせられた。クラスの子供達はすでに終わってしまい、私を待っていた。先生はカリカリして私を叩いた。私の心は傷ついて涙が止まらず、しゃくりあげて泣き続けた。先生は、なんとか私をなだめようと、謝って、私のためにパーティーをしてくれた。この先生は、私が

普通の子よりも、もっと大きな心遣いを持って接してやらなければいけない子だ、と感じてくれた最初の人だ。祖父母の家での愛情の不足をわかってくれたのだろう。

カマラ校はタバダ・ダ・アジュールにあり、タバダを通過して登校した。緑が美しく、花でいっぱいの道を通るたびに、私の心は弾んだものだ。無花果の実を食べたり、先生のために花を摘んだりしながら歩いた。あの道が大好きだった。学校が大好きだった。喘息の阻害のせいで気分が悪くなり、息苦しくて道端に座り込んだことも数え切れないくらいあるが、それでも学校に行きたかった。家にはいたくなんかなかった!先生は、学校に着いた私を気分が悪そうだから、と何度も家まで送って行った。

私はいつも、重い呼吸阻害があり、ちょっと風邪をひいただけでたびたび発作を起した。丸くふくらんだドレスを着た人が前を通ると、たちまちしゃみが出た。そんな時はベニシリンしか効かなかった。それだけでなく、風邪薬を飲んだ後には抗生物質が必要になった。たちまちのうちに炎症の症状が出てしまう。そのことと煙草がなければ、私の声は全然違うものになっていたはずだ。臆病な性格のせいで煙草を吸い始めてから、25年になる。人々が会話を始めると、私は煙草を持って部屋を行ったり来たりせずにはいられなくなり、片手はいつもせわしなかった。始めは多くの犠牲を払い、ついには癖になってしまい、止めたくても止められなくなった。

初めて人前で歌を歌ったのは、やはり学校だった。タバダ校のお祭りで、子供の親たちの前だった。フォークダンスの歌はすべて知っていたので、レクリエーションでは他の女の子たちがリフレインを歌い、私が詩の部分の歌った。ある日のこと、先生が窓辺で私の歌を聞くやいなや、お祭りでソロを歌うのは誰がいいかもうわかった、と言ったのだ。私はひどくうろたえて咳をし始めたが、最後にはそこで歌った。歌はこんな感じだった。「新しいスカートのお嬢さん、ほらほら胸に手をあてて」。私は「コラサオン(Coração)」のアクセントを一番始めに置くのが嫌だったから、別のところに置いた。私はすでに耳に聞いた感じが良いか悪いかを聞き分ける直感が備わっていた。味覚がいいのと同じ種類の感性だ。

学校時代の愛すべき思い出は、規範的な生徒というように扱ってもらったことや勉強ができたことだ。だが、他の生徒たちとの時間にかんしては、あまり素敵な思い出はない。反抗的で手のかかる子供が多かったのだ。貧しい生徒の多い学校だったが、その中でも一番ひどかった。祖母はいつも長すぎる服を縫っては私に着せた。夏のキャラコから、冬のフランネルまですべて申し合わせたように長すぎて、いつもからかい的になった。少女だったころ、たった一着だけそいきの洋服を持っていたが、それは小学校の試験に着ていくための服だった。ある先生がいるだろうというので、礼拝のために、中国更紗の布地で私にとてもよく似合うターコイズブルーの服を仕立ててくれた。私は幸せいっぱいだったが、試験が終わった後は二度と着せてくれなかった。それは特別な行事用だ、というのである。後になって少し大きくなってからもう一度袖を通してみると、なんともう小さすぎる。どれだけ悔しかったか!

〈お便りから〉

- 本日はとても素敵なプレゼントをいただき誠にありがとうございました。早速に全曲を聞かせていただきました。月田秀子さんを存じ上げていませんでしたが、すっかり歌唱に惹かれてファンの一人となってしまいました。確かに、アマリア・ロドリゲスの日本版といった感じがします。「暗いはしけ」に感動を受けてファド歌手になられた由のことですが、音質といい、歌唱力といい“哀愁”をさそい、その上、心から湧き起こる“強さ”みたいなものを、とても説得力のある歌い方で感銘を受けました。最後の波の音を聞きながら“レクイエム”の感に浸っていました。今年度の近美展の作品に影響を描き出したいものと思っています。どうもありがとうございました。

(松山・久保収三)

(今年の6月、会員の兵頭氏から、受け取ったファックスです。彼が友人の画家の方に送ったCDの礼状です。今回東京公演で、差し入れとともに、一枚の写真を頂きました。夜の海辺、一人の女が、黒いドレスをなびかせ、浮かび上がるように立っている。遅しくて、大きな足、胸に赤い薔薇を抱いて。人それぞれのレクイエム……。写真には、こんな手紙が添えられていました。

「・・・この絵は、先日上野の近美展で、入選した絵です。画題は「FADO」。秀子さんの歌を聴きながら描いたとの事。・・・」一人の女の魂が歌を生み、歌が絵を生み、絵が物語を生み、そして、歌を生む。

ふと、大阪公演後いただいたK子さんからの、お便りの一節が浮かんできた。〈ポルトガルの海辺に佇めば、まだ帰らぬ人を、待ちつづけてつづき歌う女たちの影をみる。高く低く声は波間にただよって消え、祈りとなり、傷つき嘆く人の心に届く。ファド、生きることへの願い、すこしだけの夢、そして愛。〉

松山へ私は行かなければならない。久野さんに会うために、もう一人の私と会うために)

〈アンケートから〉

- 11月28日東京帝国ホテルで開催された世界文化社創立55周年記念『イタリアの夕べ』参加者アンケート集計結果の分厚い資料が、送られてきた。家庭画報の愛読者が多いせいか、参加者150名のうち、50～60代の方が半数以上を占めていた。月田のライブに関しては、とても良い:80%、良い:15%、普通:5%、悪い:0%の評価をいただいた。晴れの場で歌うチャンスを与えて下さった五木寛之さんの思いに応えられたようでホッと胸を撫で下ろす月田です。

- お疲れ様でした。アンケートを数枚紹介します。私の感想も付け加えさせていただきます。

(名古屋2001コンサート企画・水谷静子)

- ◇ アンコール曲を聴いて、最初からもう一度聴きたいと思った。各国の歌もいいが、ファドもたくさん聞きたい。又きます。

(K・Y)

(水谷コメント:この方は1996年に初めて企画した際電話を下さって、ファドの事をいろいろお尋ねになりました。とても印象に残っています。最後に「縁があったら・・・。」と電話を切られました。五年経って縁が繋がったのだなあと感慨深いものがありました。アンケートの〈ファドをもっと聞きたい〉という声はとても理解できます。私も聴き手だったら同じことを書くでしょう。でも新しい挑戦も必要だし、悩ましい問題です。)

- ◇ 圧倒されてしまいました。最初はリズムが聞きなれなかった。とても前半はエロティックだった。イタリア曲はわかりやすかったが、でもアンコールでのファドが何か知らないが良かった。

(S氏)

(水谷コメント:〈何か知らないが良かった。〉という感想にはジーンと来ます。私も初めてファドを聴いた時は同じように感じましたから。)

- ◇ とてもいい声ですね。聞いていて心地いいです。ポルトガル語で歌って初めてファドになるんだと思いますが、メッセージ性があるので、日本語でもぜひ聴いてみたいです。

(H・A子)

(水谷コメント:「難船」とか、「どんな声で」を聴くと、日本語によるメッセージ性が生きていて、こういう曲が数曲入ることでポルトガル語もかえって生きると感じます。けれども、以前にあるライブで「暗いはしけ」を日本語で歌うのを聴いて、その訳詞に悲鳴をあげたくになりました。言葉が曲を殺してしまい、ここまでこの曲の価値を下げていいものかと怒りが込み上げました。難しい!)



◎写真撮影:藤橋 正

ficção

読切連載
 秀子のエピソード帖
 -あの頃、秀子はペコちゃんだった-
 内間 天馬

感受性が豊かでなければステージなどつとまらないんじゃないかな。それは、基本的に五感に支えられていると思います。味覚も五感の一つですよ。吉山輝という、僕がひそかに「なにわのリパッティ」と呼んでいるすごいピアニストがいます。この吉山氏、自分で蕎麦、うどんを打ち、コーヒーは生豆をみずから焙煎するという、まあ、なんとも食いしん坊なんです。味覚に敏感であることは、彼の音楽と無縁ではないと思います。月田さんも負けてないですね。牛肉も食べるが、豚が好き、とおっしゃる秀子さん。やはり、どんな街にもトンカツ屋さんがある関東出身なんですね。関東といえば、うどんより蕎麦ですわ。彼女が食べる蕎麦は、やはり本物です。秋に信州でのライブをするのは、新蕎麦が当たるとか…。つなぎなしの十割蕎麦(100%蕎麦粉)がそれ。しかし、この本物を味わえる店が圧倒的に少ないんです。手打ちじゃないのに「手打ち」のノボリを恥ずかしげもなくおたてて

いる店のナント多いことか。日本酒同様、これらを規制するまともな法律がないのが現状です。大阪大正区の「凡愚」など、食べてると自然に顔がほころんでくる次元の違う蕎麦。初めてそこで秀子さんが蕎麦を食べた時、感激に泣き出したという。その日から、昼、晩と3日間通い詰めたという伝説もあるほど。味に敏感な秀子さん。そして鈍感な厚生労働省。

ところで、先日、NHKの「人間マップ」にゲストとして出演された時のビデオを何年かぶりで見たのですが、驚きました。ほっぺなど、不二家のペコちゃん状態なんです。秀子さんお痩せになりましたね? 「うん、更年期障害のせいかしら。この前のサンケイでのコンサートの時、ブラジャー落下事件に遭遇したのよ」。ナ、ナンデスカ、それは? 「歌いながら胸に手を当てると、たしかにつけたはずのブラジャーがないの」。ブラジャーが消えたんですか? ナント奇怪な! 「それで、おへそのあたりを、何気なくまさぐると、あるじゃない。胸から落ちてたのね。ほんとに驚いたわ。歌いながらなんとかズリ上げようとしたけど、無理だったわ」。大阪の平野区で美容院を経営する尚美さん、月田さんをまぢかに見て、「やっぱりスターだわ。オーラが出てるわ」と感激しておりました。スターとブラジャー落下事件…いやはや…。

fados canções

ささやかなフアド

訳詞: Caldo Verde

日没から 月は生まれ
 月から 夜明けが生まれるように
 人生は 心から生まれる
 確固たる人生も いい加減な人生も

疲れを知らない戦士のように
 心は絶えず闘いを追い求める
 あなたを好きなのに あなたは私を苦しめる
 どれほど祈ろうと 私に救いはない

こちらへおいで、どこへ行くのかい
 今にわかるさ、あなたもいつかは衰える
 心よ、はっきりさせてくれ
 どれほど尽くし、何をするのか
 こちらへおいで、そして分かせてくれ
 深く愛するってことは どういうことかを

もうたくさんだ あなたの雄叫びについていくのは
 盲従するだけの体でいるのは
 これ以上聞きたくもない
 たとえ孤独になろうと あなたを無視する

けれど本当に心が黙ったら 私は死んでしまう
 道の半ばで途方にくれて
 わずかな温もりも慰めもなく
 心まで失ったら 私たちは無に等しい

FADINHO SIMPLE

Letra: Marta Dias
 Musica: Antonio Chainho

Do pôr-do-sol nasce a lua
 Da lua a madrugada
 Do coração nasce a vida
 Decidida e descuidada

Infatigável soldado
 Semple em busca da batalha
 Bem te quero e mal me fazes
 Não há súplica que me valha

Anda cá, onde vais
 Tu vais ver, ai que cais
 Coração, deixa ver
 Quanto dar, que fazer
 Anda cá, vem mostrar
 Como é, como sabe bem amar

Basta de seguir teus ais
 Cego músculo insensato
 Não te quero ouvir mais
 Com solidão te maltrato

Mas se ele se cala eu morro
 Perdida a meio da estrada
 Sem um calorzinho ou consolo
 Sem um coração somos nada

informação

- 年末の三都公演を無事に終えることができました。反響も今までになくよく、月田にとって、何よりもの励みになりました。ありがとうございます。2002年の公演に向け、月田は走り始めています。

月田秀子ファド倶楽部限定版として、『月田秀子コンサート2001』銀座博品館劇場でのライブビデオ(4000円)並びにカセットテープ(60分テープ2本組:4,000円)を作ることにしました。ご希望の方は、郵便振替にてご予約ください。※通信欄に内訳を必ずお書きの上、送料500円を添えてお申込ください。発送は、月田帰国後になると思います。

郵便振替:00990-6-18440 月田秀子ファド倶楽部

＜収録曲目＞ユニコーン・私の中のファド・叫び・失った心・洗濯・涙・不如意・アマリア・私のファド・祈る人・汽車は八時に出る・日曜はだめよ・ギターよ教えて・白い家・カルーソ・バルセロナの舟の上で・大河の一滴・暗いはしけ・旅の終わりに



©写真撮影:藤壺 正

- 2月13日(水)ポルトガルのカジノ・エストリルの“WONDER BAR”で歌うことになりました。すでに、応援に駆けつけてくれる人が若干一名現れています。時間とお金、それに勝る好奇心のある方はぜひお出かけください。そのため、2月の「三裕の館」でのライブはお休みにさせていただきます。
- 2月の〈NHKラジオ深夜便「ないとエッセイファドを唄いつづけて」〉で、夜11時40分ころから、十分間ほど4回に分けて、お話しをします。子守唄代わりに聴いてください。

＜月田秀子のスケジュール＞

1月	9日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ :06-6304-1745
	28日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ :06-6212-2870
	31日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ :075-361-3535
2月	13日(水)	Portugal・Casino Estril「WONDER BAR」	*問合せ :351-21-4684521
	25日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ :06-6212-2870
	28日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ :075-361-3535
3月	6日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ :06-6304-1745
	25日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ :06-6212-2870
	28日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ :075-361-3535

＜編集後記＞

謹賀新年。
CDもビデオも記録でしかない。あの会場の空気を振動させた音、聴衆の息遣いは、あの時のものでしかない。一度でいい、自分のライブを聴いてみたい、観てみたい、そんな叶わぬ夢が私にはある。その時アンケート用紙に私は何を書くのだろう。アンケートを読みながら、一喜一憂、木枯らしに揺れる蓑虫状態の今の月田です。
(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第33号
- 2002年1月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808